

平成 29 年度 MieMu の活動と運営の外部評価結果（概要）

【評価結果】

- ・ 企画展では、「のりもの」で開館以来最多の観覧者 42,981 人を獲得するとともに、「カモシカ」や「発掘された日本列島」、さらには「オリンピック・パラリンピック」と幅広いテーマを取り上げて開催し、目標（73,000 人）を上回る 79,411 人の観覧者を得た。また、展覧会毎に異なる幅広い年齢層の観覧者や、目標値を上回るリピーター（50%→69.1%）を獲得し、「何度も利用していただく」という戦略目標 1 の達成に、おおいに貢献できた。
- ・ 基本展示では、観覧者数（76,515 人）の対前年度比が 93%（平成 28 年度 89%）であったことは、「のりもの」の新規来館者や、基本展示のリピーターの割合が増加 55.6%（同 52%）したことによって支えられたと考えられ、企画展と同様に「何度も利用してもらう」という目標は達成できたと判断できる。一方で、初めて来館した人の割合が 44%（同 48%）と企画展の 31.9%と比べて高いことから、新たな来館者の掘り起こしが期待できる。今後、繰り返し訪れても陳腐化を感じさせない、計画的な展示更新や解説機会の充実、ハードウェアの補修にも努められたい。
- ・ 当館の特徴の一つである「こども体験展示」について初めて評価対象とした結果、目標を上回る利用実態（入館者の約 1/3 が利用）が明らかとなった。
- ・ 広報活動に関しては、マスコミ向けの情報提供や裏方情報を伝える動画を使った SNS の発信（Facebook 情報の充実）などに積極的に取り組み、一般への知名度も目標を上回った（75%→77%）ことは評価できる。引き続き、マスコミ等への情報提供機会の充実や、ICT を活用した情報発信に期待する。
- ・ 県民や利用者の参画については、コーポレーションデー（平成 28 年度 6 日→9 日）や出前講座（同 2 件→7 件）はますます充実するとともに、活動資金の確保（5,630 千円）でも、毎年、すぐれた実績を残している。一方、ミュージアムパートナーについてはグループや登録者の数が微減しており、新たな登録者の獲得に向けた努力が求められる。
- ・ 収蔵資料や地域の文化財等の保存・保全にあたっては、専門職員が配置され、引き続き良好な状態の確保と積極的な支援ができています。平成 30 年度からはレファレンスカウンターへの職員の常駐が見直されることから、これまでの相談機能が低下することの無いよう、適切な対応を期待する。
- ・ 総合博物館の強みを活かした研究については、他の業務が優先され、学芸ゼミの開催が不定期で、しかも発表件数が目標に大きく届かない（12 件→4 件）など、後回しになっている。こうした中であって、移動展示と関連付けた参加型調査で、地域や参加者層に偏りはあるものの、目標以上の参加者（60→89 人）を得たことは評価できる。調査・研究業務については、展示更新と同様、計画的実施やスケジュール管理が求められる。

【まとめ】

昨年度（平成 28 年度）の本外部評価結果（概要）では、開館以降の 3 年間の評価結果の推移を通して、年を追うごとに改善が進み、特に平成 28 年度で顕著であった反面、3 年続けて低い評価にとどまっている戦術があることを振り返った。そして、改善が進まない原因が、特定の業務に経営資源が集中したことや、業務の進捗管理が不十分な点にあることが判明した。

これを受けて平成 29 年度は、組織改編を行い、業務分担の明確化に努めるとともに、前年度同様に展覧会を計 10 本（企画展・交流展・トピック展）に抑え、チーム制を採り入れることで改善をめざした。しかし、展覧会に伴うイベントの開催や関係機関との連携に時間を奪われ、調査研究やその成果の公表などが十分に行えない状況や、業務の進捗管理の徹底ができなかったなど、依然、改善されたとは言い難い状況にある。

こうした状況から、平成 30 年度はさらに業務の見直しを行い、経営資源の適正な配分による偏りのない博物館活動をめざすことを、平成 29 年度中に決定した。その効果が発現するように努められたい。

今後、本評価制度が有効に機能するための前提条件として、適正な目標設定が不可欠である。過去の自館のデータのみにとらわれず、関連する他館のデータも参考に、被評価者や利用者を含めた関係者が納得できる目標の設定を求めたい。また、個々の戦術に対してアウトプット（結果）とアウトカム（成果）の両方を評定することの必要性や、戦術 14・15 のアウトカム指標は再考を要する。

最後に、改善に向けては、個々の館員が目標や到達点を共有すること、その実現に向けて各自が自己の役割を認識して遂行すること、さらに周囲の状況を掴み必要に応じて協働することが欠かせない。こうした取組みを確実に進めることで利用者サービスの向上が図られ県民の期待に応える博物館となるため、本評価制度を有効活用し、現場と設置者が一体となって不断の努力をされることを期待する。

表 1 評定点の推移（2017～2019 年度）

戦略	2017 年度	2018 年度	2019 年度	差	戦術	2017 年度	2018 年度	2019 年度	差
戦略 1	4				戦術 1	4			
					戦術 2	2			
					戦術 3	4			
戦略 2	4				戦術 4	4			
					戦術 5	4			
					戦術 6	4			
戦略 3	4				戦術 7	3			
					戦術 8	4			
					戦術 9	4			
戦略 4	4				戦術 10	4			
					戦術 11	4			
戦略 5	3				戦術 12	1			
					戦術 13	4			
					戦術 14	4			
戦略 6	4				戦術 15	4			
					戦術 16	2			
戦略 7	3				戦術 17	2			
合計	26	0	0			58	0	0	
百分比	93%					85%			

「差」とした 2 列の値は、■年度と▲年度の比較。